

## J.S.ミルの性格形成論における「性格形成の自由」

— ロバート・オーエンの理論への批判検討 —

奥井 現理

On Liberty to Form Our Own Character

in J.S.Mill's Theory of Education

— A Study of Mill's Criticism against

the Theory of Robert Owen —

Genri OKUI

**要旨：**J.S.ミルの性格形成論は、自由意志論ではなく、必然論に依拠している。そうであれば、人間の性格形成は、あらゆる自然現象と同様に、因果関係をそこに見いだすことができる現象として想定されているのでなくてはならない。その際、人間の自由意志を第一原因とするのでなければ、究極的には、人間は自らの性格を自由に形成しているとはいえないのではないかという疑問が残されることになる。その一方でミルは、ロバート・オーエンの、いわゆる環境決定論を批判し、人間は自由に自らの性格を形成すると述べている。本稿では、ミルのオーエン批判を検討することを通して、ミルが批判したのは、オーエン理論の、性格形成論としての過度な単純さであって、環境決定論そのものではないこと、さらに、ミルは、自由意志を第一原因とすることが性格形成の自由の前提条件であるとは考えていないことが明らかにされる。

**Key words：**自由 (Liberty), J.S.ミル (J.S.Mill), 性格 (Character), ロバート・オーエン (Robert Owen)

### 問題の所在

J.S.ミル (John Stuart Mill, 1806-1873) が、その主著『自由論』の執筆目的としたものの一つは、自らの性格を自由に形成する各人の権利が社会的に保障されるべきものであることを明らかにすることであったということに、さしあたりの異論はなからう。ミルのその主張は、各人が自身の性格を形成する自由の、個人及び社会に与える利益が多大であるという見解に根拠づけられている。

『自由論』は私の書いた他のいかなるものよりも長い生命をもちそうである……。なんとすれば、彼女

〔妻ハリエット・テイラー〕と私との共同作業が、それ〔『自由論』〕をある真理に関する哲学の教科書のようなものにしたからである。……〔その真理とは〕つまり、性格のタイプの大きな多様性があるということ、及び、人間本性に、無限の、相矛盾する方向へと展開するための完全な自由 freedom を与えるということが、個人にとっても社会にとっても重要であるということ〔である〕<sup>1)</sup>。

そうであれば、人間の性格は変化しうるものであって、その変化は、社会的環境の整備いかんによって影響を受けうるものであるということ、性格形成の自由を保障することの前提としてミルが確信していたのでなければ

ならない。

ところで、周知のようにロバート・オーエン (Robert Owen, 1771-1858) の性格形成論は、ミルのそれと同様に環境決定論に基づくものである。ミルはオーエンの性格形成論を宿命論として退けるが、このことと前段において確認されたミルの確信とは、必ずしも首尾一貫しているものではない。むしろ、オーエンの性格形成論に対する批判においてこそ、ミルの人間形成論の本質及びその問題点が明らかになるのである。なんとなれば、オーエンの性格形成論もまた、ミルのそれと同様に、人間の性格を変化しうるものと位置付け、そのための社会環境の整備を求めるものであり、ミルの性格形成論も、単純にオーエン的な宿命論に対置される自由意志説を全面的に支持しうるものではないからである。

本稿の目的は、ミルが宿命論とみなすオーエンの性格形成論との比較検討を通して、ミルの述べる「必然 necessity」および「自由」の位置付けを究明することである。そのために、ミルが自由意志説をではなく必然論を真とし、環境と人間の性格の間には因果関係が明確に成立すると考えていたことと、それにもかかわらずオーエンの宿命論的な性格形成論を退け、個々人の性格形成の自由を社会的に保障するべきであると主張したこととの間に、論理的一貫性及び妥当性があるか否かを検証したい。

### ミルの性格形成論とオーエンの性格形成論の相違

ミルの性格形成論とオーエンの性格形成論の相違点は、一見明らかである。ミルの性格形成論が自己形成を可能とするものであることに対し、オーエンの性格形成論はそれを全く不可能とするものである点である。しかし、オーエンの著書及びそれに記された実践内容を検証すれば、彼が性格形成という人間の変化・成長を不可能なものと考えていたことに

疑いの余地はないことには、さしあたりの異論はなかろう。オーエンの性格形成論は、人間が生まれもった性質を、どんなことをしても変化・成長させることは不可能であると論ずるものではないことは明らかである。

……私は1800年1月のはじめごろに、ニュー・ラナアックの統治に取りかかった。私があえて「統治」というのは、私の意図が、綿紡績工場の単なる一管理人になり、当時そうした紡績工場が一般に管理されていたようなやり方で管理を行うことにあるのではなく、私がすでにドリンクウォーター氏の工場において労働者たちに対して成功裏に着手していた行動 conduct の諸原理を導入して、私が見たところニュー・ラナアックの全ての人々の性格に有害な影響を及ぼす諸環境に囲まれていた人々の状況を変化させることにあったからである<sup>2)</sup>。

オーエンは、ニュー・ラナアックにおける人々の性格及びそれを形成する環境の改善を志し、実際にそれに取りかかったのであるから、当然に、自らの実践が人間の性格及びそれを形成する環境を変更しうると信じていたのでなければならぬ。オーエンがこのように信じていたのは、過去に、ドリンクウォーター氏の工場における「諸原理」に基づく行動が成功を収めたためである。その諸原理とは、以下のような確信に基づく性格形成原理である。

私たち人類の性格は、神すなわち自然によって、また社会によって形成される formed. それだから、いかなる人間も自身の性質あるいは性格を形成しえたとか、形成しうるということは、まったく不可能事なのである……<sup>3)</sup>。

つまり、オーエンの性格形成論の基礎的な枠組みは、人間の性格は自然及び社会といった環境によってのみ形成されるという確信とによって示される。さらに、こうした確信に基づく性格形成原理とは、『新社会観』に示されている次のようなものである。

どのような一般的性格をも、最善のものから最悪のものまで、最も無知なものから最も啓蒙された

ものまで、適切な諸手段によって、どのような地域社会にも、世界全体にさえも備えさせることができよう。これら諸手段は、そのほとんどが、人間の世事に影響力をもつ人々の支配、統御下にあるのである（傍点部は、原文では斜字体、以下同様）<sup>4)</sup>。

また、次のようにも述べている。

人間本性に反しない、いかなる言語、情操、信念、または身体的な習慣・作法をも、子どもは訓練されて習得しうる……<sup>5)</sup>。

すなわち、オーエンの性格形成論は、環境決定論の立場を採るものではあるが、オーエンは性格形成の原因としての環境を人間（ただし「世事に影響力を持つ人々」に限られる）の手で変化させることが不可能であると考えていたわけではない。当然にまた、その環境下にある人間（労働者等）をもまた、本性上は性格を変化させるものとして考えていたことも明らかである。それだから、オーエンの性格形成論において、人間にとって性格の自己形成が不可能である所以は、ほとんどの人間が自身の環境を変化させることができないということ、及び、環境を変える以外に性格を変化させる方法が存在しないということである。オーエンのこの確信は、子どもが驚くほど多くのことを受動的に吸収することに比して、環境に対してあまりにも無力であるという実感に基づいている。オーエンは、子どもを「例外なく、驚くほど作り込まれた複合体」であって、「性格のこれら原因の一つも自らの意のままにならず、またいかなる意味においても自ら統御できるものはない」と見なし、性格形成の原因としての環境を自身で統御できないものと考えたのである<sup>6)</sup>。

人間の性格は、ただ一つの例外もなく、常に本人のために *for him* 形成される……性格は主に彼の前世代の人々によって作られているのであるし、今後もそうであろう。前世代の人々は、彼に、彼の行動を統御し導くまさにその力であるところの

諸観念や諸習慣を与えるのである……。それゆえ、人間は、自身の性格を形成したことはなかったし、それが可能であったこともない<sup>7)</sup>。

こうしたオーエンの徹底した環境決定論は、人間の自由意志の存在、少なくともその機能を、当然のように否定する。人間は、環境によって刻印された諸観念や諸習慣を忠実に行動に反映させる存在であって、自発的な意見をもったり、それに基づいて行動したりするものではない。

……人間の意志は、彼のもつ諸意見に対して何らの力ももたない……。彼は、前時代の人々や彼を取り巻く諸環境によって心に刻印されてきた、されている、されるであろうことを信じざるをえなかったし、そして必ず信じたのであるし、信じるであろう（この箇所の傍点部は、原文では大文字）<sup>8)</sup>。

オーエンのこうした性格形成論は、むしろ今日では普遍的な真理を説いているとは考えられないであろう。たとえば、『新社会観』においては、オーエンの手腕により善良・勤勉な性格を形成された人々が、はたして大人になっても自己の環境を変える力をもたないものであるかを詳細に論じた箇所はみられない。また、オーエンの性格形成の原理及びそれに基づく性格形成の手法が、あらゆる人種に属する人々、あらゆる文化・宗教的背景をもつ人々など、多様な人々にも有効に作用する普遍性をもつものであるか否かも、十分に検討されているとはいえない。土方直史が「いかにも実践家らしく、オウエンは、自分自身の個人的な経験を通じて、素直に「事実」を観察すれば「真理」が見えてくると信じていた。……だが、彼の観察と実践による真理の検証には、客観性が乏しかった。しばしば、自分の経験を信頼するあまり、それを絶対視する傾向があったからである。実践による検証という近代的主張はその意義を失い、主観的なドグマとなる側面をあわせ持つことになった」<sup>9)</sup>と指摘し

ているように、オーエンの性格形成原理が普遍妥当な真理としての十分な科学的検証に耐えたものであるとは到底いえないことは明らかであり、また、オーエン自身もそうした科学的な手続きの必要性を感じていなかったのではないかと考えられている。しかしながら、後世においてオーエン主義者と呼ばれる人々を輩出し、各国に社会変革の気運を作り出すなど、大きな影響力をもったことは事実である<sup>10)</sup>。次節では、ミルがこうしたオーエンの性格形成論の影響力の大きさをゆえに、その不十分な点や矛盾点に正面から取り組み、自らの人間形成論をつくりだすに至った経緯を述べることを通して、その人間形成論における「必然」および「自由」の位置付けを明らかにする。

### ミルの人間形成論における「必然」の概念

ミルの述べる「必然」の語義は「継起関係の斉一性」であって、これは自然現象におけるそれと同様に、「意志に適用されたときでも、ある原因にその結果が付随するというこのみを意味する。ただし他の原因によって反対作用を受けるあらゆる可能性があることを前提条件とする」<sup>11)</sup>という単純明白なものである。この語義から明らかとなる、自然科学上のそれと同じ「必然」の位置付けは、自然科学の手法を社会科学に適用するというミルの『論理学体系』の全体構想上、必要なものであった<sup>12)</sup>。なんとすれば、自然現象と複合的な人間の心的現象である社会現象と同じ科学的手法を適用するためには、その両者に科学的理論の基礎である原因・結果の必然性が同様に成立することを前提としなければならないからである<sup>13)</sup>。

正確に考察すると、哲学的必然性と呼ばれる学説は、単純に以下のようなものである。個人の精神に現れるある動機を考慮に入れたら、また同じようにある個人の性格と性向とを考慮に入れたら、

その個人が行為するその仕方は、誤ることなく推理されるということである<sup>14)</sup>。

こうしたミルによる「必然」の語義及び位置付けは、心の活動に恒常的な連結を認め、「それは自然の要素や力が相互に働きあうときと同じ仕方」であって、「観察者は私たちの行為をふつうに動機や性格から推理できる」としたヒューム (David Hume, 1711-1776) による「自由と必然」考察におけるそれを継承しているといえよう<sup>15)</sup>。それゆえ、ミルの述べる人間精神における「必然性」もまた、自然現象における必然性と同様に、観察者からの予測可能性という形で具現化するのである。私たちは、ある人物の、ある動機及びある性格が継起または共存したことと、その人物がある意志をもってある行為に及ぶことを、まったく無関係であるとは考えないであろうし、その行為はもちろん予測可能であつたろう。こうした予測は、もちろん外れる場合もあるが、それは私たちの、その人物の内的な動機及び性格を十分に把握していなかったか、もしくは外的な反対作用を予測し損なつたからであって、それがその人物の精神における諸現象の予測可能性そのものを否定するものではないことは明らかであろう。

そうであれば、人間の行為を律する性格そのものもまた、何らかの原因の結果であると考えなくてはならない。周知のようにミルは、広い意味での環境を原因とした人間の性格形成という現象に自然科学の手法を適用させることによって、「性格学」の成立を目指したのであるから、ミルは自由意志説を妥当な学説であるとは考えていない。むしろ、明白に意志は性格に制約され、性格は環境に制約されるものとして位置付けられる。そうであれば、ミルの性格形成論は、オーエンのそれと同様の基礎の上に立っていることになる。そうであれば、ミルがオーエンの環境決定論を、宿命論として退けた理由は、人間の性格形成が環境によって規定されるという発想そのもの

には存しないことになる。ミルが、意志・環境・性格形成への影響の理論的整合性追求を試みた痕跡が端的に表れているのは、『自叙伝』中の一節である。

私たちの性格は環境によって形成formされるが、私たち自身の欲求はそれらの環境を形づくるshapeことに大きな働きをなしうること、自由意志説にあって人を真に勇気づけ高貴にさせるものは、私たち自身の性格を形成する真の力を私たちがもっているという確信であるということ、私たちの意志が環境にいくぶんかでも影響を与えることによって、私たちの意志することの習慣や能力を作りかえるmodifyということ、私は理解した。こうしたことはすべて、環境説と完全に両立しうるし、むしろこの学説そのものを適切に理解したものであった<sup>16)</sup>。

この『自叙伝』の記述からは、少なくとも以下の三点のことが推論される。第一に、ミルが環境決定論を支持していること、第二に、少なくともミルは自由意志説の「人を真に勇気づけ高貴にさせる」という効果は認めているということ、第三に、人間の意志の存在そのものは認めていることである。これらの諸点は、必ずしも問題なく調和するものではない。もしミルが環境決定論を支持しているのであれば、人間の意志も環境によって形成されるものでなくてはならず、それゆえ自由意志説がもつ「効果」は失われかねないからである。それでは、ミルはいかにして、これらの諸点を調和させたのであろうか。

少なくとも第一の点は、ミルが「自由と必然」考察(『論理学体系』第六巻内)において「これらの意見[必然論と自由意志論]のうちの前者を私は真と考えている」<sup>17)</sup>と述べたことから明らかである。その一方で、すでに述べたようにミルは宿命論を退けている。

私たちの行為は私たちの性格に随伴し、私たちの性格は私たちの身体組織、私たちの教育、私たちの環境に随伴すると信じる必然論者は、多かれ少なかれ意識的に、彼自身の行為に関して宿命論者

になりがちであり、彼の本性はこれこれであり、彼の教育と環境とが彼の性格をこのように形成したmouldので、今ではある特有の仕方では彼が感じまたは行為することを妨げる何ものもありえず、彼自身のどのような努力もこれを抑止できないと信じがちである。……しかし、これは大きな錯誤である<sup>18)</sup>。

問題となるのは、ミルの見解がオーエンの性格形成論を全面的に受け入れうるものであるか否かではない。確かに、ミルのこの見解は、オーエンの「人間は、自身の性格を形成したことはなかったし、それが可能であったこともない」という見解と対立する。しかしそうであるからといって、ミルとオーエンの性格形成論が全てにおいて対立するものであるということとはできない。真の対立点は、「彼の本性はこれこれであり、彼の教育と環境が彼の性格をこのように形成」するという性格形成論が真であるか否かではなく、「ある特有の仕方では彼が感じまたは行為することを妨げる」ものがありえるか否か、及び「彼自身のどのような努力もこれを抑止でき」るか否かである。

ミルは、「私たちが意志すれば、私たち自身の性格を形成できるのは、他の人々が私たちの性格を私たちのために形成できるのとまったく同様である」<sup>19)</sup>と述べ、性格を自身で形成する力の存在に言及している。それゆえ、性格の自己形成を完全に不可能とするオーエンの主張とは完全に対立するようは一見すると思われる。しかし、ここにおいて注視しなければならないことは、ミルが「私たちが自身の性格を、私たちが望むのであれば、変化させる」と単純には述べていないことである。

子細に検証すれば、私たちはある感情を発見するであろう。それは、私たちが自身の性格characterを、私たちが望むwishのであれば、変化させようというこの感情は、私たちが意識する道徳的自由moral freedomの感情である。自身の習慣や誘惑的気分habits or his temptationsがではな

く、自身こそが自分の主人であると感じる人間は、道徳的に自由であると感じるのである<sup>20)</sup>。

ここにおいてミルは、私たち自身が性格を自己形成するという現象を、客観的事実としてではなく、私たちの「感情」の次元において扱っているのである。客観的事実と、私たちがそれに対して抱く感情は同じものではないことは明らかであろう。これを裏付けるのは、『論理学体系』においてミルが「感情はその物理的先行条件となるものから区別されなければならない」と述べた箇所である。

私が青い色を見るとき意識するものは、青い色の感情である。私の網膜上の像、すなわち私の視神経や脳のうちに起こる、現在のところ神秘的な性質の現象は、私がまったく意識することのない、科学的探究のみが私に教えることができた、これとは別種のものである<sup>21)</sup>。

それゆえ、ミルが宿命論を批判した理由は、必ずしもそれが客観的事実と符合するものであるか否かによるものではない。それではミルは、宿命論のうちの何を退けたのであるかを考察しなければならないであろう。ミルは、オーエン主義の見解を要約して、次のように述べている。

しかしこの「私たちが意志すれば」という言葉は、論点全体を放棄するものである。なんとなれば私たち自身の性格を変えようとする意志は、私たち自身の努力によって生ずるのではなく、私たちのいかんともしがたい環境によって生ずるものであるからである。その意志は外部の原因から来るのであって、そうでなければ、全く生じないものである<sup>22)</sup>。

ミルはこのことに対し「オーエン主義者がここで立ち止まっているならば、彼の地位は排除されざるものである」とし、この理論が真であることを承認している。その上でミルは、オーエン主義者の述べる「環境」には、私たち自身の願望 wish も含まれており、そうした願望に基づく性格形成は、必ずしも完全に

外部の原因のみによる必然的なものと呼ぶことが適当でないと考えている。

私たちの性格は、私たちのために形成されていると同じく、私たちによって形成される。しかし、これを形成するように私たちを誘う願望は、私たちのために形成されている。どのようにしてであるか。一般的にいて、私たちの身体組織によってではなく、また全般的にいて、私たちの教育によってでもなく、そうではなくして、私たちの経験によってである。その経験とは、私たちがこれまでもっていた性格に基づく苦い結果の経験である。または偶然に呼び起こされた感嘆または熱望という強い感情によってである<sup>23)</sup>。

こうした経験や感情すらも、その原因は外部の、本人にはどうすることもできないであろう出来事により引き起こされうることを、ミルは認めている。つまり、こうした経験や感情は、全面的に自発的な現象であるということとはできない。しかし同時に、必ずしも「私たちの身体組織」という生物学的条件によってのみ引き起こされたものや、「教育」といった他者の意図によって発生させられる現象のみでもないことを指摘してもいる。そうした経験や感情をもたらす出来事及びそれにより引き起こされた感情は、外的にもたらされるものであるが、そうした感情と、それにより引き起こされた性格を変えるという具体的な行為との中間には、本人が内的に統御することが可能であるという心的状態と呼ぶものが実践的には存在するとミルは考えていたのである。これを裏付けるのは、ミルによる次の記述である。

性格が究極的には自身のために形成されているということは、性格が部分的には中間作用因の一つである自身によって形成されていることと矛盾しない。自身の性格は自身の環境（自身特有の身体組織もこれら環境に含まれる）によって形成されるが、性格をある特定の仕方形成しようとする自身の欲求 desire は、これら環境の一つであって、それは決して影響力の最も弱いものではない<sup>24)</sup>。

この記述からは、自身が性格を形成することができるという「道徳的自由の感情」及び、それに基づいて引き起こされる、自身の性格を形成したいという感情とが、性格形成に内的な影響を与えているというミルが考えていることが明らかであろう。しかしそれは、あくまで内的と呼びうるということなのであって、すでに述べたようにミルは、性格形成という現象における原因はすべて広い意味での環境に包括され、かつ性格形成という現象はすべて因果関係に従って起こると考えている。それゆえ、ミルの人間形成論においては、性格形成の因果の鎖を逆にたぐってゆくと、必ず外的要因と呼ばれる要因にたどり着く。しかし、その過程においては、外的要因によって本人の内部で引き起こされた心的状態をも経由していることをミルは想定している。しかもこの鎖が、外的要因、内的要因を複雑に経由し絡み合った複数の鎖であれば、その一端のみを究明することのみをもって、人間の性格があたかも外的環境によって直接に形成され、そこには本人の力がまったく介在しないかのように述べることは、明らかに適当ではないであろう。それゆえ、ミルがオーエン主義において批判されるべきと考えていた点は、第一に、その単純さに由来するものである。

ミルがオーエン主義を批判する第二の点は、その理論の内容にあるのではなく、その理論が人間の心にもたらす効果である。

私たちが自身の性格を変える力をまったく持たないと考えることと、私たちが自分の力を用いようと欲求しない限り私たちの力を用いないであろうと考えることとは、全く別のことであり、このことは精神に全く異なった効果をもたらす<sup>25)</sup>。

私たちが「自身の性格を変える力をまったくもたない」と考えることによって私たちにもたらされる効果とは、「落胆discourage」及び「麻痺paralyse」である<sup>26)</sup>。すなわち、性格に基づきどれほど苦い経験をして、自分

の性格は改善されえないのでいかんともしたいと考えたり、またはどれほどすばらしい性格の持ち主に出会いその人格の高潔さに感嘆しても、自分の性格はけっしてこのようにはすばらしくならないと考えたりするようになるという効果、すなわち性格に関する向上心を喪失させるという効果である。ミルは「宿命論者の理論のもつ人間を憂鬱にさせる効果は、その学説が不可能と示すことをしたいという願望が存在する場合にしか作用しない」<sup>27)</sup>と述べ、もし私たちがオーエンの性格形成論によって落胆させられたり精神的に麻痺させられたりするのであれば、それは、私たちのうちに性格を変えたいという感情が実践的に存在していることの証左であるとしている。ミルは、それが真であるか否かという観点から自由意志説を擁護したのではなく、その人間に与える効果が有益であるか否かという観点から自由意志説を擁護したのである。

自由意志説は、必然という言葉によって見落とされていた真理、すなわち性格の形成に精神があずかる力をもっているという真理の側面を、はっきりと注意させることによって、……いっそう真理に近い実践的な感情をこの学説の遵奉者に抱かせる結果となった。必然論者は、人間相互の性格を形成するのに人間がなしうことの重要さに関しえずと明確な意識をもっていたであろうが、自由意志説は、その支持者に、自己陶冶のより強固な精神を養ったと私は信ずる<sup>28)</sup>。

そうであれば、ミルの述べる自由な性格形成とは、自由な意志に基づくという意味での自発的なそれなのではなく、広い意味での環境に基づく心的現象を原因とし、予測可能な現象としての性格の変化を結果として実現しようとする主体的な過程なのであるといえよう。それゆえ、ミルがオーエンの性格形成論を批判するのは、第一に、その単純さゆえに、性格形成における主体性と呼ぶべきものが想定されていないからであり、第二に、人間の向上心を失わせるがために、主体性と呼ぶべき

ものを育む可能性をも完全に遮断してしまっているからなのである。

ミルは、オーエンの性格形成論を批判して自由意志説に与したのではなく、人間の性格形成及び性格に基づく行為という、複雑に因果関係が絡み合う現象のうちに、人間が何を自由意志の働きであると見なしてそれにより勇気づけられてきたのであるか、その正体を明らかにしようとしたのである。また、その自由意志の働きと見なされてきたものの存在及びそれを知ることが人間に与える心理的効果を承認することによって、オーエンが単純に否定した、自身による性格形成の力の存在に関しても、この性格形成という現象の複雑さのうちに、人間が自身の性格を自由に形成しているといっている現象が確かに起こっているということを明らかにしたのである。このように人間の性格形成を前提としたという点で、ミルの「自由と必然」考察は、ヒュームのそれを理論的に進歩させたものであるといえよう。性格形成を経て、知覚の主体である人間そのものが変化・成長してゆくのであり、その過程においてこそ人間は自由の感情をもちうるという視点は、ヒュームの考察には見られない。またそうした視点に基づいて、オーエンの単純な想定が抱えもつ宿命論的な性質を批判することを通して、ミルは人間に自己形成への勇気を与える理論的基礎を築いたといえよう。それゆえ、ミルは、ある一時点における人間の行動における因果関係という次元においてではなく、複数の時点間においては、性格形成を経て人間そのものの変化・成長に伴い性格及びそれに基づく行為を変化させることが可能であるという人間形成的地平に立つことにより、オーエンの宿命論を退けるに至ったのである。よく知られたように、一時期、ミルはオーエンの性格形成論に苦しめられ、意気消沈（精神的危機）の再発までも招いたのであるが、それを克服することにより、イギリス経験論の系譜上に、

統治者・為政者・宗教的指導者等のそれではなく、私たち一人一人の視点において実践的・生産的と呼べる人間形成論をもたらすに至ったということができよう。

## おわりに

端的には、環境と性格との間の因果関係の高度な複雑さによる予測困難性こそが、私たちが自由であるという意識を支えているものであるとミルは考えていたことになろう。ミルの時代においてはもちろん、今日においてもこの予測困難性が完全に解消されているとはいえないであろう。この困難性は、ミル自身にもある影響を与えている。アレキサンダー・ペインに宛てた手紙の中でミルは「私は、いつになったら『性格学』を書き始める準備が整うか、わかりません。この計画は、私の内でまだ確たる形をとっていないのです」<sup>29)</sup>と述べており、後年においても、性格学に関する独立した著作の執筆を断念したミルは、結局は性格形成の具体的な法則を何も提示することができなかったといわれている<sup>30)</sup>。しかし、それは、ミルが私たちのもつ自由の感情の価値を最大限に尊重し、その哲学的な位置付けを明らかにするために、「必然」の位置付けを詳細に、そして慎重に考察した結果である。ミルにとって「自由」とは、自然科学上は、あくまで意識の上に起こる私たちの感情の一つでしかなかったのではあるが、そうした位置付けが自由の人間形成論における価値の大きさを減ずるものではないとミルが考えていたことは、後世の『自由論』における次の記述から明らかであろう。

ついには、自身の本性に従わないことによって、彼らは従うための本性をもたなくなってしまう。彼らの人間諸能力は衰え、枯渇させられる。彼らはいかなる強い願望 wish も自然な快楽ももてなくなり、たいていは、自身から作られる、あるいは正当に自身のものである意見も感情もなくしてしまう。さて、これは人間本性の望ましい状態なので



あろうか。それともそうではないのであろうか<sup>31)</sup>。

また、性格形成の法則と呼ぶことをミル本人が許すほどに一般化されたものは見られないにしても、ミルの広範な著作中には、『論理学体系』における性格学の手法を部分的に適用したと考えられる考察が多く見られるのである<sup>32)</sup>。ただし、こうしたことをもってしてのみ、ミルの『論理学体系』における「必然」及び「自由」の位置付けが、後年の著作においても一貫したものであると断言することはできないこともまた明白である。筆者は、ミルの「自由」及び「必然」の位置付けが後年の諸著作においても一貫しており、またその考察内容も妥当なものであると考えているが、その一貫性及び妥当性を検証することは本稿の趣旨を超えてしまうので、ここで一旦筆を置くこととする。

## 註

- 1) Mill: *Autobiography* (1873), *The Collected Works of John Stuart Mill volume. I*, University of Toronto Press, Toronto, 1981, p.259. 以下、ミルの著作からの引用箇所は、慣例に従いトロント大学版ミル著作集をCWと表記したうえで、その巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で示す。なお、ミルの『自叙伝』からの引用に際しては、邦訳としてジョン・スチュアート・ミル(朱牟田夏雄訳):ミル自伝, 岩波書店, 東京, 1960を参照した。また、筆者は『自叙伝』に関しては原則として、コロンビア草稿より引用している。
- 2) Owen: *The Life of Robert Owen written by himself with selections from his writings and correspondence. Volume I*, Effingham Wilson, Royal Exchange, London, 1859, (reprinted by Augustus M. Kelley Publishers, New York, 1967), pp.56-57. なお、邦訳はロバート・オウエン(五島茂訳):オウエン自叙伝, 岩波書店, 東京, 1961を参照した。
- 3) *Ibid.*, pp.58-59. なお、オーエンはこの『自叙伝』の別の箇所で、「真の宗教」を探し、宗教的偏見から解放されて自己を確立したその思想形成過程において同様の確信をもったと書いている。それによれば、「私の理性が私に教えるところによれば、私は私自身の諸性質 qualities のうち一つをも作ることはできていなかった。それらは自然によって私に強制されたものである。私の言語、宗教、諸習慣は社会によって私に強制された。それだから、私は全く自然及び社会の子である。自然がそれら性質を与え、社会がそれを方向付けしたのである」(*Ibid.*, p.16)とあり、これはおおむね同様の趣旨に基づいていることがわかる。本稿の趣旨を超えるのでこの欄に記すにとどめるが、オーエンがこのような確信を抱きはじめてのは、この『自叙伝』によればドリンクウォーター氏の工場を管理していた二三歳のころであるが、これにはオーエン自身の「自己顕示欲」が見られ不正確であるとされている。このことに関しては、永井義雄:ロバート・オウエンと近代社会主義, ミネルヴァ書房, 京都, 1993に詳しい。同書pp.141-142等参照。
- 4) Owen: *A New View of Society; or, Essays on the principles of the Formation of the Human Character, and The Application of the Principle to Practice*, in *A New View of Society & Other Writings with Introduction by G.D.H.Cole*, Everyman's Library edited by Ernest Rhys, New York, 1929, p.16. なお、邦訳はロバート・オーエン(斎藤新治訳):性格形成論—社会についての新見解—, 梅根悟・勝田守一監

- 修, 世界教育学選集, 明治図書, 東京, 1974を参照した。
- 5) *Ibid.*, p.16.
  - 6) *Ibid.*, p.22.
  - 7) *Ibid.*, p.45.
  - 8) *Ibid.*, p.53.
  - 9) 土方直史:ロバート・オウエン, 研究社, 東京, 2003, p.50.
  - 10) 「オーエン主義Owenism」や「オーエン主義者Owenite」という語に関して, J.F.C.ハリソンは, G.D.H.コールの「オーエン主義の基礎は, 彼(オーエン)の教育理論である」という語を紹介しつつ, 「ニュー・ラナアックにおける目を見張るばかりの実験の性質や, 非暴力の訴え, 広く受け容れうる社会変革の手法, そしてオーエンが繰り返し強調した性格形成教育の重要性, こうしたものがみな相まって, 彼の成し遂げたことのうち, この側面[教育]に注目が集まるに至ったのである。オーエン主義は実際に教育と同義語になったのである」と述べている(J.F.C.Harrison: *Robert Owen and Owenites in Britain and America The Quest for the New Moral World*, Routledge and Kegan Paul, London, 1969, p.138)。なお, 日本においても「ロバート・オウエン協会」が昭和33年に設立されており, ロバート・オウエン協会編:ロバート・オウエン論集〈ロバート・オウエン生誕二百年記念〉, 家の光協会, 東京, 1971などの編著書がある。
  - 11) Mill: *CW* VIII, p.839. なお, 『論理学体系』からの引用に際しては, 邦訳としてJ.S.ミル(大関将一訳):論理学体系 論証と帰納 I-VI, 春秋社, 東京, 1949-1959を参照した。
  - 12) ミルは『論理学体系』第六巻の冒頭部で, 「継起の現象に関するあらゆる科学的理論の基礎である因果関係の恒常性は, それら[人間の行為]相互の間にも, 実際に妥当するであろうか。このことはしばしば否定されるが, 体系を完全にするために, ここで詳細に答えておかなければならない」(*CW* VIII, p.835)と述べ, 精神科学, 社会科学において自然科学におけるそれと同様の因果関係の恒常性が妥当することを前提としている。
  - 13) 因果関係そのもののミルによる証明は, 『論理学体系』第三巻において試みられているが, 究極的には事実の単純枚举とその分析・総合による。これはヒュームの述べる「恒常的な連結」をより詳細に述べたものとして位置付けられよう。
  - 14) Mill: *CW* VIII, pp.836-837.
  - 15) David Hume: *A Treatise of Human Nature* (1739), *A Treatise of Human Nature*, edited by David Fate Norton and Mary J. Norton, Oxford Philosophical Texts, New York, 2000, pp.257-262. なお, この引用に際しては, 邦訳としてヒューム(土岐邦夫訳):人生論, 世界の名著32 ロック ヒューム(大槻春彦責任編集), 中央公論社, 東京, 1980所収を参照した。なお, ミルがヒュームの「自由と必然」考察を継承したと考えられるのは, ミルの「自由と必然」考察中に, 「自由意志を主張する形而上学者たちは, もっぱら原因と結果に関するヒュームとブラウンの分析を拒否する学派に属する人たちであって, この分析が照らした光への路を見失っている」(*CW* VIII, p.838)という記述があるからである。
  - 16) Mill: *CW* I, p.177.
  - 17) Mill: *CW* VIII, p.836.
  - 18) *Ibid.*, p.840.
  - 19) *Ibid.*, p.840.
  - 20) *Ibid.*, p.841.
  - 21) Mill: *CW* VIII, p.53.
  - 22) Mill: *CW* VIII, p.840.
  - 23) *Ibid.*, pp.840-841.

- 24) *Ibid.*, p.840.
- 25) *Ibid.*, p.841.
- 26) *Ibid.*
- 27) *Ibid.*
- 28) *Ibid.*, pp.841-842.
- 29) Mill: *CW X III (The Earlier Letters of John Stuart Mill 1812-1848)*, p.617.
- 30) John Gray: *Mill's Conception of Happiness and the Theory of Individuality*, in *J.S. Mill On Liberty in focus*, ed. by John Gray and G.W. Smith, Routledge, London and New York, 1991, p.204. なお、邦訳はジョン・グレイ, G.W. スミス編著 (泉谷周三郎, 大久保正健訳): ミル『自由論』再読, 木鐸社, 東京, 2000 を参照した.
- 31) Mill: *CW X VIII*, p.265. なお、『自由論』からの引用に際しては, J.S.ミル (早坂忠訳): 自由論, 世界の名著38 ベンサムJ.S.ミル (関嘉彦編集), 中央公論社, 東京, 1967所収を参照した.
- 32) 『女性の解放』における女性の性格形成への言及は, その最たるものであるといえよう.